

# 法持寺の門葉寺院について

川 口 高 風

## 一、現在の門葉寺院

現在の法持寺（名古屋市熱田区白鳥）の門葉寺院は二十  
三カ寺がある。しかし、延享年間（一七四四―四七）に調  
査された『延享度寺院本末牒』によれば、二十七カ寺が  
あった。その中、塔頭が十カ寺あるため、境外地の門葉は  
十七カ寺であった。現在は存在せずに廃寺されたり、離末  
した寺院が塔頭の一雲院、三笑軒、東陽軒、太虚院、耕雲  
院、高岩院、無翁院を始め大泉寺（古渡村）、長明寺（海  
東郡西条村）の二カ寺がある。また、香樹院は大運寺、林  
昌寺は宝昌寺と改称しており、延享年間以後に、門葉と  
なった寺院には妙覚寺（熱田区）、地藏寺（瑞穂区）、庚申

法持寺の門葉寺院について（川口）

寺（一宮市）、天年寺（中川区）、慧光院（天白区）があ  
る。

妙覚寺は明和元年（一七六四）に法持寺十五世督宗淳重  
によって殿堂が一新され法地となり末寺になった。その他  
は法持寺二十八世鼎三即一が復興したり、その門下によっ  
て起立された寺院である。なお、鉄地藏堂は昭和二十七年  
七月に単立となって離末し、吒枳尼天堂は昭和五年から同  
十二年の間に法持寺へ合祀され、廢堂となった。

次に現在の門葉寺院の略由緒をながめ、歴代住持と示寂  
日をあげてみる。続いて、かつて法持寺の門葉であった  
が、離末したり廃寺した門葉寺院の由緒などもみてみよ  
う。

法持寺の門葉寺院について（川口）

春養寺 亀丘山 愛知 98 名古屋市熱田区旗屋町五〇三

春養寺は真言宗の喜見寺（名古屋市熱田区神宮）の六坊の一つ春養院を、祥光荷公（寛永十四年（一六三七）十二月三日寂）が現在地へ移転再興して曹洞宗に改めた寺院である。法持寺七世嫩桂祖林はその草創開山に迎えられ、寛永三年（一六二六）に法持寺より春養寺へ隠棲した。また、再興された時、法持寺住持であった月峰慶呑も二世に勧請した。

本尊大日如来坐像は法持寺境内より掘り出された仏頭といわれている。『永平寺前住牒』（大本山総持寺蔵）の宝永三年（一七〇六）八月九日項によれば、法持寺十三世輪山東叡は春養寺に借住して永平寺へ出世している。

文政三年（一八二〇）には字林萬喬が法地再興したが、燈外禅燈を勧請して法地開山とし、自らは二世となった。

なお、法持寺二十世大疑覚道は黄龍寺（名古屋市南区呼続）住持時代（天明八年（一七八八）―享和三年（一八〇三））に春養寺の伝法第一世に勧請されている。明治三十二年には十世寶山大光が本堂を再建したが、昭和二十年五月

十七日の戦災で焼失した。そのため仮本堂で運営してきたが、十二世泰山光道は平成元年に本堂を再建して落慶法要を厳修した。

歴住・示寂日

草創開山	嫩桂祖林	寛永九年八月七日
二世	月峰慶呑	承応四年二月三日
法地開山	燈外禅燈	享和二年三月二十三日
二世	字林萬喬	天保十二年七月二十九日
三世	竹道来観	弘化二年三月五日
四世	祖室容元	安政五年八月十五日
五世	安井良潤	明治十年正月十一日
六世	端溪志静	萬延元年六月十三日
七世	昌雄萬丈	明治四十四年十一月二日
八世	哲玄亮周	明治二十八年五月十六日
九世	毘婆白巖	
十世中興	寶山大光	昭和十一年六月十七日
十一世	泰安明道	昭和二十一年二月十八日
十二世重興	泰山光道	平成八年七月十四日
十三世	泰仙明光	（現住）

月笑寺

明野山

愛知102

名古屋市熱田区明野町八一九

塔頭の章で考察したように、天正十五年（一五八七）に建立されている。しかし、草創の由緒などは不詳である。

開基は鈴木七左衛門で、中興開基は鈴木治左衛門である。

明治初期に法持寺二十八世鼎三郎一が法地開祖となり、

法地開基が大島全瑞尼であるところから、尼の実弟で二世の童拳天珠（大島氏）が実質的働きをして法地開闢したものと思われる。昭和二十年五月十七日の戦災で焼失したが、同二十六年に現在地へ移転して寺号を月笑軒より月笑寺と改称し再建された。

歴住・示寂日

- 法地開祖 鼎三郎一（自他） 明治二十五年十一月二十八日
- 二世 童拳天珠（大島） 明治三十七年四月二十一日
- 三世 玉宗道博 明治三十一年十一月二十六日
- 四世 慧等兼修（山田） 昭和十四年八月十五日
- 五世 積成泰山（浅井） 大正七年十一月十四日
- 六世中興 泰高如山（浅井） 昭和五十六年三月七日
- 七世再中興 泰雲義山（浅井） 平成十四年十二月十三日

法持寺の門葉寺院について（川口）

八世

泰道義博（浅井）

（現住）

洗月院

旗屋山

愛知97

名古屋市熱田区旗屋二二七一九

塔頭の章でみたように、草創は弘治元年（一五五五）である。開創に関する由緒などは不詳で、開基は岡本作左衛門、岡本儀兵衛、岡本清吉である。

明治初期に三世童拳天珠が法持寺二十八世鼎三郎一を請して法地開山となし、師兄の吹毛冷生を二世に勧請して自らは三世になったと思われる。昭和二十年五月十七日の戦災で焼失したため、同二十七年に現在地へ移転して再建された。

歴住・示寂日

- 法地開山 鼎三郎一（自他） 明治二十五年十一月二十八日
- 二世 吹毛冷生（藤林） 明治三十一年一月二十八日
- 三世 童拳天珠（大島） 明治三十七年四月二十一日
- 四世 亨元貞道（山田） 大正二年七月十日
- 五世 慧等兼修（平野） 昭和十四年八月十五日
- 六世 大器堅丈（伊藤） 昭和二年十一月十三日

法持寺の門葉寺院について（川口）

七世中興 讓山謙隆 昭和五十七年二月十五日

八世 祖学隆明（現住）

梅萼院 白鳥山 愛知100 名古屋市熱田区白鳥一―八―七

天正元年（一五七三）に梅萼林公座元によって開創され、寛保年中（一七四一―四三）に中村七兵衛が中興開基となつて復興された。平僧地時代の世代は、

一世梅萼林公座元 承応二年（一六五三）十一月

二世方山翔公首座 寛文三年（一六六三）正月

三世随峯流公首座 元禄十年（一六九七）二月

四世節心存光首座 元禄四年（一六九一）正月

五世明叟存光首座 宝永六年（一七〇九）四月

六世中興禅苗淳碩首座 寛政九年（一七九七）八月

七世耕牛碩田首座 天明八年（一七八八）五月

八世祖山悟宗首座 文化元年（一八〇四）十一月

九世葬元鼎享首座 弘化元年（一八四四）六月

十世 不明

十一世 不明

十二世仙峯大忍首座 安政六年（一八五九）八月

となるが、明治八年には玄同圭宗が法持寺二十七世大達玄中を勧請して中興開山とし、圭宗の本師拙堂魯中を二世に入れ、自らは三世となつて法地開闢を行っている。四世禅機悦堂は同二十九年三月に住職し、大正二年十一月に本堂を再建して、同五年春に入仏式を挙行した。しかし、「黄龍拙堂魯中禅師行状略伝」によれば、拙堂魯中が黄龍寺より梅萼院へ閑栖する際、法地起立し先師の大達玄中を開山に勧請して、自らは二世となつたとする説もある。

昭和二十年五月十七日の戦災で伽藍は焼失したが、九世徳愷靈鳳は戦前と同じ境内地に本堂を再建した。それは同三十八年である。

歴住・示寂日

法地開山 大達玄中 明治六年九月九日

二世 拙堂魯中（魯中） 明治三十二年十月十六日

三世 玄同圭宗（圭宗） 明治二十八年五月二十一日

四世 禅機悦堂（悦堂） 大正十二年八月四日

五世 鶴道仙翎（仙翎） 大正七年一月二日

六世 蘭溪瑞芝（瑞芝） 昭和十年一月三日

七世 翔南瑞鳳 昭和二十六年六月十九日  
 八世 大雄輝念 昭和二十年十二月十七日  
 九世 德愷靈鳳 平成三年四月二十二日  
 十世 説三禪鳳 (前任)  
 十一世 大拙高裕 (現住)

光明院 大乘山 愛知17 名古屋市中村区名駅五―七―九

光明院は大永年中(一五二―二七)に香林宗萼が清須に開創した寺院で、法持寺三世月洲瑞香が開山に勧請されている。慶長遷府の際、現在地に移転した。寛文十一年(一六七二)九月二十七日、元禄十三年(一七〇〇)二月七日、享保九年(一七二四)五月十三日、同十五年(一七三〇)二月四日の四度、類火に罹り諸堂宇を焼失した。しかし、そのたびに再興された。第二代尾張藩主徳川光友は鷹狩の際、第五世慧洲聞公に聖徳太子作と伝えられる薬師瑠璃光如来の因縁などを聞いて喜び、それ以来、しばしば来院した。

明和九年(一七七二)二月には法地再興され、その伝法

法持寺の門葉寺院について(川口)

第一祖に当時、法持寺十五世であった督宗淳董を勧請した。法地にした実質的働きは大鏡全牛(法地中興開闢二世)が行っており、法地開基は前年(明和八年)三月二十八日に示寂した大通覚道である。

歴住・示寂日

開山	月洲瑞香	天文十三年四月二十三日
開創	香林宗萼	天正六年八月十五日
二世	香山寅公	
三世	龍顔秀公	承應元年三月三日
四世中興	天寶周球	寛文八年四月二十二日
五世	慧洲聞香	元禄十二年八月二十九日
六世中興	大中歆龍	元禄十七年三月十一日
七世	仁室英恕	
八世再中興	修岳善公	宝永元年八月四日
九世	曠山慈寛	享保五年四月八日
十世	智山道之	延享四年五月二十八日
十一世	大林培之	宝暦二年十月十三日
法地重興	大通覚道	明和八年三月二十八日
法地重興開基	督宗淳董	寛保二年三月十一日
伝法第一祖		

法持寺の門葉寺院について（川口）

法地中興 開關二世	大鏡全牛	文化九年三月六日
三世	透関栄徹	享和二年九月十日
四世	嫩喬全桂	天保五年八月十三日
五世	大倫祖孝	天保八年四月六日
六世	空如道雲	天保九年三月十日
七世重興	蘭馨歛秀	明治十七年三月十七日
八世	拳従道虔	明治二十二年十二月二十九日
九世 随意会開關	雲瑞祥鳳	明治三十八年八月二十一日
十世	大圓忍法	明治三十六年一月六日
十一世 常恒会開關	戒覚量孝	大正元年八月二十二日
十二世	隆道達宗	昭和二十二年十一月十六日
十三世重興	戒心政孝	昭和三十八年二月八日
十四世	戒秀順孝	平成五年九月六日
十五世	戒光鈞隆	平成四年三月十九日
十六世	戒眼弘明	（現住）

空雲寺

道龍山

愛知 129

名古屋市中川区中島新町四一  
二〇一

空雲寺は『尾張徇行記』によれば、愛知郡高針村の禪源

寺を移築したとある。しかし、空雲寺に所蔵する『年回早繰帳』の冒頭にある「當山由緒」や『年中行事簿』の「當山來歴」、開山堂の聯などによれば、寛文元年（一六六一）六月十五日に春日井郡大留村（現在、春日井市大留町）にあつた善（禪）源寺の寺号を譲り受けて鬼頭景義が開基となり、法持寺九世大通快道を開山に迎えて開かれた。

開基の鬼頭景義は、江戸初期に出た稀代の新田開発王といわれ、寛永八年（一六三一）から明暦三年（一六五七）までの二十六年間に海東、海西、愛知、知多、春日井の旧尾張五郡と美濃の安八郡の合せて二十七ヵ村、約三千八百町歩、石高にして二万二千石の新田を開発した。木津用水や萱津用水なども開いており、尾張藩より苗字帯刀を許されている。

大通の後住には法持寺十世海岸義雲が就いた。墓碑銘、位牌ともに「二代中興」となっているが、その経緯は明らかにならない。寛文元年（一六六一）に開創されて以来、五十年後には伽藍が大破した。その原因は庄内川の大洪水によって新田の堤防が破れたため、掛搭していた大超義

円首座は鬼頭兵内（景義三男）、同勘兵衛（同二男）、同十良右門（同四男）、同平六良、同市太良らの助力を得て、享保十二年（一七二七）四月十二日に再建した。

大超義円首座は「當山來歴」によれば三代目とあり、四代目は牧堂祖牛首座、五代目大柔孝倫首座と続いている。

しかし、二代は海岸義雲でなく鉄叟单青首座となっており、当時の空雲寺は平僧地であった。その關係を图示してみると、

草創<sup>三代</sup>開山  
大通快道（一六七）——海岸義雲（一六九）——鉄叟单青（<sup>二代</sup>）  
大超義圓（一七〇）——<sup>四代</sup>牧堂祖牛（一七六）——<sup>五代</sup>大柔孝倫（一七六一）

となる。そのため海岸は空雲寺の開創にあたり、本師の法持寺住持であった大通を迎えたのではなからうか。実際は海岸が草創開關に尽力しており、自らは二代となつて、後に中興号が贈られたのではなからうか。当時、平僧地であったため法地に昇格するにあたり、法持寺十五世督宗淳董を拝請した。その年月は不詳であるが、「<sup>年中行事</sup>當寺來歴簿」や空雲寺の過去帳の示寂年次の寛政二年（一七九〇）項によれば、金五十両を法持寺へ拝請して法地開山へ迎えてい

法持寺の門葉寺院について（川口）

る。

その後、文政十一年（一八二八）十一月に四世凌雲盤山が本堂、玄関、庫裡、長屋などを改造しており、安政元年（一八五四）十一月四日の大地震によつて庫裡が倒壊した。そのため八世拙堂魯中は翌三年八月に庫裡を再建した。明治二十四年十月二十八日の濃尾大地震によつて山内の堂宇はすべて倒壊したため、十二世蘭溪瑞芝は檀信徒の助力を得て翌二十五年三月十八日に再建した。昭和五年十月二十五日には、十三世靈峰松巖が新しく庫裡を造り、同十五年には鐘樓堂を備えた。同三十四年九月二十六日の伊勢湾台風では本堂の瓦が移動し、鐘樓堂は倒壊、山内の樹木は折れたり枯死して大被害を受けている。

歴任を位牌から整理してみると、平僧地時代は、<sup>草創開山</sup>大通快道（一六七）（本堂第一回草創・寛文元年（一六六一）六月五日）——<sup>草創二代</sup>海岸義雲（一六九）——<sup>三代</sup>鉄叟单青（不詳）——<sup>四代</sup>大超義圓（一七〇）（本堂第二回再建・享保十二年（一七二七）四月十二日）——<sup>五代</sup>牧堂祖牛（一七六）——<sup>六代</sup>大柔孝倫（一七六一）となり、法地以後は、

法持寺の門葉寺院について(川口)

法地開山  
 督宗淳董(一七九〇)——大圓孝道(一七九七)——大應義全(一八二〇)  
 ①三世②四世大中興  
 凌雲盤山(一八三〇)(本堂第三回目建立・文政十一年)  
 (一八八)十一月吉日)——不詳——默定契禪(一八四七)、道悟宣  
 默(一)——棟屋仏州(一八〇六)——拙堂魯中(安政三年)  
 (二八五)八月・第四回日庫裡造宮)——少林得髓——独庵豊  
 州——鶴道仙翎——蘭溪瑞芝(明治二十五年三月十八日・  
 第五回目建立)——雲峰松巖——栽松徳元  
 ③三世④四世  
 となつてゐる。

歴住・示寂日

草創開山 大通快道 延宝五年一月十六日  
 草創二代 海岸義雲 元禄五年九月十五日  
 三代 不詳  
 四代 大超義圓 明和七年九月十三日  
 五代 牧堂祖牛 明和五年九月二十日  
 六代 大柔孝倫 寛政九年十二月十九日  
 法地開山 督宗淳董 寛政二年三月十一日  
 二世 大圓孝道 寛政九年十二月十九日  
 三世 大應義全 文化八年十二月十日  
 四世大中興 凌雲盤山 天保元年八月十五日

五世 不詳  
 六世 默定契禪 弘化四年七月四日(三月十四日)  
 六世 道悟宣黙  
 七世 棟屋仏州 明治三十九年十月十日  
 八世 拙堂魯中 明治三十二年十月十六日  
 九世 少林得髓 大正十二年八月二十八日  
 十世 独庵豊洲 明治十四年七月三日  
 十一世 鶴道仙翎 大正七年一月二日  
 十二世 蘭溪瑞芝 昭和十年一月三日  
 十三世中興 靈峰松巖 昭和四十六年九月二十日  
 十四世 栽松徳元 平成二十年十二月二十二日  
 十五世 晋岳康弘(魚崎) (現住)

大運寺

法輪山 愛知18 名古屋市瑞穂区十六町二―四

大運寺は初め大悲山香樹院と号し、天文年中(一五三二―一五四)に法持寺三世月洲瑞香の開闢である。その経緯は明らかでないが、天文十年(一五四一)に創建された法持寺塔頭の太虚院住持であつた香山潢公(慶長十五年正月二



十六日叙)が建立している。同じ月洲が開創した光明院と同じく清須に開創されたものと思われ、慶長遷府の際に、南寺町(白川町)へ移転したものであろう。

本尊の釈迦如来座像は元禄八年(一六九五)二月四日に披露済で、宝永六年(一七〇九)二月、三世中興龍源香澤の代に大涅槃図が什物となっている。その後、宝暦七年(一七五七)三月には吉田清左衛門(安永六年(一七七七)正月二十八日没)が中興開基となって法持寺十四世義山淳孝(宝暦七年(一七五七)三月六日叙)を法地開山に迎えた。明和二年(一七六五)三月には鐘堂の大鐘に三世智翁淳哲が銘を記しており、天明五年(一七八五)十月二十四日に現在の山号、寺号に改めた。

すでに文政十一年(一八二八)には、遠州の秋葉山秋葉寺の尾張の御供米取次所になっており、秋葉堂があった。同年二月より四月までの秋葉寺御開帳にあたって銅瓦の寄進を受けている。

大正二年九月には九世芝山玄靈が随意会を開闢した。昭和十八年には石切町(名古屋市中区白川町)より現在地(名古屋市瑞穂区十六町)へ易地され、伽藍も移築した

法持寺の門葉寺院について(川口)

が、同三十四年の伊勢湾台風によって本堂などが倒壊した。そのため同四十七年十一月には本堂の再建落成がなつた。

歴住・示寂日

草創開山	月洲瑞香	天文十三年四月二十三日
當院前住	靈堂白龍	
法地中興	龍源香澤	
當院三世中興	義山淳孝	宝暦七年三月六日
法地開山	雄州亮契	
二世	智翁淳哲	
三世	國全淳長	
四世	要山黙宗	
五世	俊芳大靈	文久三年五月十八日
六世	豊隨大年	文久二年六月六日
七世	黙耕靈庵	明治七年六月二十四日
八世	芝山玄靈	明治四十二年四月六日
九世	素雲玄龍	大正六年五月二十日
十世	素朴玄暉	昭和四十四年十月二十五日
十一世	大洞光昭	(現住)
十二世		

法持寺の門葉寺院について（川口）

洞仙寺 瑞雲山 愛知31 名古屋市中区伊勢山一―一二九

洞仙寺の草創は尾張守護斯波義健の嫡男千代松丸（永正二年（一五〇五）七月六日没）が出家して玉泉玄珠と称した。その玉泉が文明三年（一四七二）に一字を建立して玉泉庵と称したが、明応年間（一四九二―一五〇一）に無本寺の寺院は許されない触が出たことにより、二代喜翁秀頼は法持寺に依頼してその末寺となった。当時の法持寺住持は三世月洲瑞香であったところから開山になったと思われる。

戦災で焼失した本尊の十一面千手観音立像は恵心僧都源信の作で、源頼信より頼朝まで数代にわたって尊崇された本像の念持仏であった。それを天和四年（一六八四）に七世日洲禅東が求めて本尊となしたといわれる。また、桃巖梅という梅の木があり、紅白交じりの見事な花を咲かせた。これは織田信秀（信長の父・法名萬松寺殿桃巖道見大居士）の手植の木であったところから名付けられた。しかし、この梅も戦災で焼失した。名古屋城築城の際には加賀家の普請場となり、国家老の横山山城守が止宿して工

事の指揮をとった。

寛文七年（一六六七）には寺号を洞仙寺と改めたが、平僧地であったところから栄達太處が開基となり、密伝心宗が法地に昇格させて「再中興法地草創始祖」となった。二世には法持寺十五世督宗淳董が就き、三世天宗太清、四世秀山太苗と続いたが、現在の洞仙寺世代では密伝心宗が二世再中興となっており、督宗は世代に入っていない。

七世絃外契音は、寺産を整理して土蔵、高塀、小座敷、位牌堂などを建立し、諸堂宇を修復して什具を備えた。その後、明治十四、五年頃には七世日洲禅東の隠居所として建立された大泉寺（以前、古渡村に所在した）を廃し洞仙寺と合併した。

昭和二十年三月十二日の夜間空襲によって諸堂宇を焼失したが、同二十八年には再建された。その後、平成八年から同十年一月には本堂、ホール、書院などが再建され、同十一年十一月七日に落慶法要が行われた。

#### 歴住・示寂日

草創開基 玉泉玄珠 永正二年七月六日  
草創開山 月洲瑞香 天文十三年四月二十三日

二世	喜翁秀頓	天文三年八月五日
三世	盛屋秀茂	慶長七年正月二十一日
四世	行室覚除	
五世中興	月庵玄的	寛文三年七月六日
六世再中興	洲山芳益	延宝五年八月十日
七世	日洲禪東	宝永五年二月四日
八世	梅谷吟鶯	元禄七年十月八日
九世	東洲栄頓	寛保三年七月二十八日
法地開基	栄達太處	明和元年九月五日
再中興二世	密伝心宗	安永九年四月十五日
三世	天宗太清	文化十五年正月六日
四世	秀山太苗	寛政十二年八月十二日
五世	盧洲太教	文化十四年七月二十三日
六世	必山密穩	文化十三年十二月十九日
七世	弦外契音	安政二年十二月十六日
八世	隨應保順	
九世	無関禪透	明治二十二年十月三日
十世	大鼎禪雄	明治三十三年十二月三日
十一世	大峰良雄	明治十六年四月十一日

法持寺の門葉寺院について(川口)

十二世	大禅実雄	明治二十一年三月二日
十三世	超音提宗	明治二十年七月九日
十四世	悟庵南裔	大正十四年十一月二日
十五世	関山無提 <small>(市山)</small>	昭和四年一月二十五日
十六世	南嶽藏海 <small>(浅井)</small>	昭和四十八年一月十七日
十七世	大智亮信 <small>(松色)</small>	昭和十九年六月九日
十八世	大機圓應 <small>(松色)</small>	平成元年三月二十七日
十九世	大規憲明 <small>(尾崎)</small>	(現住)

### 禅養寺

天徳山 愛知<sup>126</sup> 名古屋市中村区鳥森町七一八二

禅養寺の創建年次は詳らかにならないが、明応五年(一四九六)には悦山慶忻(天文二年(一五三三)十二月九日示寂)が開基となっており、永禄年中(一五五八―六九)に兵火に罹って堂宇を焼失し寺領も没収された。そのため飯堂を建立して本尊を安置した後、文禄年中(一五九二―九五)に鬼頭内匠義直が伽藍を再興して中興開基となっている。その後、延宝年中(一六七三―八〇)に副田勘左衛門が伽藍を修復して再興したが、久しく平僧地であったた

法持寺の門葉寺院について（川口）

め元禄三年（一六九〇）に岳室宝積（宝永四年（一七〇七）八月二十六日示寂）を迎えて寺格を法地に再興し中興開山とした。岳室宝積と大洋宗春との関係は明確にならないが、大洋かその弟子らの法を嗣いだところから當寺開法に勧請されたのではなからうか。

副田勘左衛門の女が尾張二代藩主徳川光友の子松平出雲守に嫁ぎ、生まれたのが徳雲院殿心月電光大童子であった。しかし、延宝六年（一六七八）八月二十三日に早逝したため、禪養寺で葬儀を行い開基とした。

明治期になると、二十世拙堂達玄が明治四年五月に玄関を、同六年三月に稻荷堂を自費で新築している。同二十四年十月二十八日の濃尾大地震で諸堂宇は倒壊したが、同二十八年に再興された。その後、昭和五十七年十月には本堂の大修理が行われている。なお、世代の順が位牌と墓誌では異なっている歴住もみえるが、ここでは位牌の世代によった。

歴住・示寂日

當寺開法	大洋宗春	寛永九年正月五日	二世	徳峯本清	元文四年二月十五日
中興開山	岳室寶積	宝永四年八月二十六日	三世	要津策玄	延享元年十二月二十三日
			四世	特巖卓志	宝曆二年六月十六日
			五世	梵鷲微白	宝曆三年五月二十二日
			六世	龍堂泰唵	天明七年正月五日
			七世	梵中泰音	安永三年三月二十二日
			八世	月海光禪	文政九年五月七日
			九世	寛成臨道	天保二年二月二十四日
			十世	敢亭義勇	文政十一年五月二十一日
			十一世	海岸道水	
			十二世	寛翁心海	
			十三世	弘道仙邦	
			十四世	子道大應	嘉永元年八月九日
			十五世	仏国悟宗	安政元年六月十日
			十六世	天外石文	明治四年二月十八日
			十七世	真契祐天	明治三十二年四月六日
			十八世	玄深靈海	大正四年十二月一日
			十九世	拙堂達玄	大正四年一月十三日
			二十世		

- 二十一世 法山泰道 大正十三年十月十三日
- 二十二世 得髓貫道 明治四十三年八月
- 二十三世 巍山萬乘 明治四十二年六月
- 二十四世中興 默山素道(加藤) 昭和十二年二月十六日
- 二十五世重興 碧雲素山(加藤) 昭和四十一年二月四日
- 二十六世 天心素明(加藤) (前住)
- 二十七世 太奥直之(加藤) (現住)

**宝昌寺**

秋葉山

愛知 374

愛知県海部郡大治町大字花常字  
東屋敷三

宝昌寺は明治二十五年に金宝山林昌寺より改称した。同十七年一月に五世村上良音が記した「由緒書」によれば、然ルニ寺草創開山ハ白鳥山五世春沢祖豊老師也天正年中織田家清洲ニ在城ノ頃信長公招請ニ応シ當山ヲ開拓シ法堂建立シ御本尊華嚴ノ釈尊脇士普賢文殊四天王等ヲ奉安置天下安全五穀成就武運長久火災消除ノ為メ山鎮ニ守ニ権ニ現ニ彼ニノ尊像ニ奉ニ勸請ニ矣  
其後天正十八年ニ開祖遷化シ玉ヒ副住大洋宗吞和尚ハ法持寺エ移転シ信長公落城ノ砌リ追々平院ト成ルコト

法持寺の門葉寺院について (川口)

凡二百五十年間也<sup>①</sup>

とあり、草創開山は法持寺五世春沢祖豊で、天正年中(一五七三—一九一)に織田信長が清須城に居住していた頃、法堂を建立して本尊、脇士、四天王などを奉安した。その後、天正十八年(一五九〇)に春沢が示寂し、副住職で二世の大洋宗吞は法持寺へ転住した。信長は天正十年(一五八二)六月二日に本能寺の変で自刃したため、寺は衰退し平僧地となったとある。しかし、宝昌寺の過去帳にある由緒書によれば、

愛知郡熱田法持寺末寺

禅宗曹洞派

海東郡花常村

金宝山林昌寺

平僧地

- 一、慶長三戊年入江夢庵開基と相見申候事夢庵何人等申儀不相知候
- 一、開山は本寺法持寺五代春沢和尚等相見申候事
- 一、境内広サ之儀此節尔等致シ候儀難申候尤除地等相見申候事
- 一、花常村え引寺之境相知不申候慶長年右村に建立等

法持寺の門葉寺院について(川口)

相見候事

二月

一、金宝山林昌寺境内壹反六畝式拾五歩伊奈備前守殿御除地文化元甲子年七月廿七日本山<sup>(1)</sup>祿所正眼役寮

より改有之候

とあり、慶長三年(一五九八)に入江夢庵(入江基右衛門のこと)が開基となつて春沢を開山に迎えた<sup>(2)</sup>とある。すでに春沢は示寂しているため、二世大洋宗呑かあるいは中興の一庭舟(寛文十年(一六七〇)四月二日示寂)が春沢を勧請したのではなからうか。

二世大洋宗呑以後の世代は、過去帳に、

當寺前任宗外禪燈上座

天明三癸卯年三月九日

當寺靈麟本瑞上座

寛政八丙辰年四月朔日

當寺前任勝參別宗上座

文化七庚午正月七日

當寺前任心入大賢上座

文政十二年丑十二月廿六日

當寺前任大鏡照山上座

天保四癸巳十一月廿日

當寺前任大覺正宗首座

とあるが、すべて前任となっており、正確な世代さえも明らかにならない。

文化元年(一八〇四)六月十二日には酒井惣吉、藤原利貞、母方の先祖である開基の夢庵の一六一年忌法要を営んでいる<sup>(3)</sup>。その時、酒井惣吉は春沢の位牌を再建しており、その位牌には、

(表) 前総持當寺開山春沢豊大和尚禪師

(裏) 天正十八庚寅年三月二十八日

酒井惣吉

再建之

とある。その後、入江氏の衰微により、一時、村預りとなつたこともある。

正眼寺文書の「法持寺末寺住職隠居届」によれば、

當寺小末寺海東郡花常村林昌尼寺光岳尼安政三年辰十月隱居仕候後住病氣に付年越無住節之御奉申上候<sup>(4)</sup>

とあり、安政三年(一八五六)十月、光岳尼は隠居した

が、後住は病気で無住となっていた。過去帳の前住の世代は続いて

覺音淨眞法尼 寛政十一己未年正月八日

貞珊良岳法尼 文化十三年九月四日

光岳惠忍法尼 嘉永六丑年八月十七日

貞倫清淨法尼 安政四巳年四月二十五日

純識淨生法尼 萬延元年十一月十八日

悅應貞純法尼

とあるため、実質は、尼僧が住持していた尼寺であったであろう。慶応三年（一八六七）二月、花常村庄屋の文蔵と林昌寺且方の重吉は、林昌寺を法地として再興するため、法持寺二十八世鼎三を、再興開山へ迎える旨を正眼寺に願上げ、

乍恐奉願上候御事

愛知郡熱田法持寺末寺當村林昌寺開山之儀は右法持寺五代祖豐和尚にて天正十八寅年三月二十八日被致迂化二代宗吞和尚法地再興仕度本寺并且方村中年來之志願に御座候得共至て困究村之儀に付右催も難仕是空敷通來申候然處右寺住僧南窓僧儀今般隱居仕候跡早速

法持寺の門葉寺院について（川口）

後住之儀可奉願筭御座候處後住御願之儀は先差扣今般法地再興仕度且方村中一統奉願上候右願之通御聞濟被成下置候はば再興開山之儀は本寺法持寺住持鼎三和尚を相立申度奉存候且又法地相續料之儀は別紙に書上申候通相違無御座候て末々無斷絶法地相續可仕と奉存候勿論本寺并且方村中何れも納得仕何方に少も故障無御座候間願之通相叶候様寺社御奉行所へ被 仰達被下置候はば難有仕合可奉存候已上

慶應三年 卯二月

海東郡花常村

庄屋 文 藏 印

且方 重 吉 印

正眼寺御役寮

さらに、鼎三も同月、再興開山となつて伽藍開法を行う旨を寺社奉行所へ願上げている。

奉願上候御事

當寺末寺海東郡花常村林昌寺開山之儀は當寺五代祖豐和尚にて天正十八寅年三月廿八日被致迂化二代宗吞和尚法地相續致來候處早晚之頃より歎平僧住職地

法持寺の門葉寺院について（川口）

に相成申候依之法地再興仕度當寺并旦方村中年來之志願に御座候得共至て困究村之儀に付右催も難仕是空空鋪過來候然處右寺住持南窓僧儀(6)今度致隱居候跡早速後住之儀可奉願候筈に御座候處後住御願之儀は先差扣今般法地再興仕度旦方村中一統奉願上候右願之通被仰付被下置候はば再興開山之儀は拙僧相立并伽藍開法之儀も拙僧仕度奉願候且又相續料之儀は村方より別紙に書上申候通相違無御座候て末々無斷絶法地相續可仕と奉存候

右遂吟味候處當寺は勿論檀方村中何れも納得仕録所正眼寺えも申達何方に少も故障無御座候間右願通被仰付下置候はば難有仕合可奉存候已上

慶應三年 卯二月

愛知郡熱田

法持寺印  
鼎三書印(7)

寺社御奉行所

また、鼎三は林昌寺法地再興の相統料金五兩を預り置く

ことも寺社奉行所へ申上げており、

御願旁御達申上候御事

一金五兩也

右は今般當寺末寺海東郡花常村林昌寺儀法地再興奉願候に付別紙村方より書上之通右寺相續料に備置申渡奉存候尤拙僧再興開山に相立申に付本寺之の冥加金は爲納不申候間右寺相續料のみ何卒前顯之金子御奉行所之御預り被成下御證文之儀は林昌寺宛に御指下ケ被仰付被下置候様仕度奉願候依之御願旁御達申上候已上

慶應三年 卯二月

愛知郡熱田

法持寺(8)

寺社御奉行所

その結果、同月に寺社奉行所、正眼寺より鼎三へ、林昌寺再興開山の免狀申渡が下された。

免狀申渡

熱田 法持寺

鼎三

其寺末寺海東郡花常村林昌寺儀二代宗吞込法地相續いたし來候處早晚之頃より歟平僧住職地に相成居候付今般法地再興致度右願之通相濟候はば其方致開法再興開山之儀も其方相立度之旨願之趣夫々吟味之上承届候條



永久法地相續并伽藍傳法斷絶無之様可被取斗者也

慶應三年<sup>卯</sup>二月

正眼寺 印

熱田 法持寺

其寺末寺海東郡花常村林昌寺開山祖豐二代宗吞迄法地に候處早晚之頃より歟平僧住職相成候付法地再興致度右願之通相濟候はば其方致開法再興開山にも相立度旨夫々願之通承届候條永々法地斷絶無之様可心得候

慶應三年<sup>卯</sup>二月

寺社奉行所 印<sup>⑩</sup>

林昌寺法地起立には、鼎三の弟子確傳が働いていたように、宝昌寺文書整理番号三十二には、

慶應三<sup>卯</sup>年二月

法地起立諸願達客

林昌二世確傳叟

とあり、寺社奉行所や正眼寺へ法地起立諸願達を届けている。二世には、確傳衣燈が就き、三世は節道晚香、四世萬慶全透、五世琴堂良音と続いた。良音代の明治十五年六月十八日には秋葉寺出張教会所となり、秋葉教会愛知本部と

法持寺の門葉寺院について(川口)

して、愛知県下の秋葉講などの講中総取締となった。それは再興開山の鼎三が明治十四年に秋葉寺の復寺第一世になったため、秋葉寺役僧となり秋葉寺本殿再建に尽力したのである。<sup>⑪</sup>

そこで、同二十六年五月三十一日<sup>⑫</sup>には、

改 寺 届

大治村大字花常

寶 昌 寺

右舊稱林昌寺を六月三十一日願濟改寺候ニ付御届仕候也<sup>(マ)</sup>

右 寺 住 職

年 月 日

海東郡大治村助役 伊藤六三郎殿<sup>⑬</sup>

と改寺届の控があり、林昌寺より宝昌寺へ改号するとともに、山号も金宝山より秋葉山と改称した。さらに、良音は明治三十六年に本堂を再建しており、昭和五十一年に八世天真無学が修復した。

(一) 宝昌寺文書整理番号一七四の「由緒書」にある。

法持寺の門葉寺院について（川口）

- (2) 『大治町史』（昭和五十四年十二月 大治町役場）四六八頁の宝昌寺由緒、『愛知県歴史全集』寺院編（昭和六十年七月 愛知県史誌出版協会）四九九頁の「秋葉山宝昌寺」にいう。

- (3) 宝昌寺の過去帳の由緒書に、文化元年甲子年六月十二日當寺開基夢庵居士當年百六拾一年に相成酒井惣吉藤原利貞母方之先祖開基故寸志之法会等致供養其上當寺開基之儀本山不申及一家中并在所之人々承候處當寺之儀は入江甚右衛門法名夢庵等申入開基にて何之年開基等申事不知當寺も無住勝にて寺は村預りにも相成入江氏之子孫も追々衰微致委細之書付言伝等尔等致候事無御座付寺社方御役所にて御内々之御吟味頼候處書付被下候写左之通とあり、明らかになる。

- (4) 正眼寺文書（現在、愛知学院大学附属図書館寄託）整理番号一六二二にある。
- (5) 宝昌寺文書整理番号三十。
- (6) 正眼寺、寺社奉行所への願上では、南窓の隠居とあるが、南窓については不詳である。しかし、当時の住持は、純識浄生法尼か悦應貞純法尼でなかるうか。
- (7) 宝昌寺文書整理番号三十三。
- (8) 宝昌寺文書整理番号三十八。
- (9) 昭和十一年六月調査の「曹洞宗寺籍簿」の宝昌寺由緒に

- よれば、二月二十四日とある。
- (10) 宝昌寺文書整理番号四十二。
- (11) 拙著『白鳥鼎三和尚研究』（昭和五十七年六月 第一書房）八十六頁の第五章秋葉寺住持時代の第六節に詳しく述べている。

- (12) 昭和十一年六月調査の「曹洞宗寺籍簿」の宝昌寺由緒に、五月三十一日とある。
- (13) 宝昌寺文書整理番号二十五には六月とあるが、五月の誤りであろう。

歴住・示寂日

草創開山	春沢祖豊	天正十八年三月二十八日
二世	大洋宗吞	寛永九年一月五日
法地開山	鼎三即一	明治二十五年十一月二十八日
二世	碓傳衣燈	明治三十五年八月十日
三世	節道晚香	明治六年三月二十一日
四世	萬慶全透	明治十七年一月二日
五世中興	琴堂良音	明治三十八年八月二十八日
六世	大應禪晃	大正八年五月十五日
七世	徹覚継宗	昭和五十六年四月十日
八世	天真無学	

九世 大徹良範 (現住)  
(大徹)

た、同三十三年には殿鐘を什具として発起していることが、鐘銘に

東昌寺

放光山 愛知372 愛知県海部郡大治町大字東条字郷内四五

海東郡大治村東條中

惣代 安井吉次郎

明治三十三年旧二月

東昌寺

三世 葛龍代新調

東昌寺は『尾張徇行記』によれば、草創年次は不詳で、初め東照庵と称した。享保十二年(一七二七)に法持寺二世弘海義全が東昌庵と改号し中興した。山号は法光山であるが、『尾張志』には放光山とある。

とあることから明らかになる。平成十年二月十一日に火災にあい、地藏堂を残して焼失したため、現在は再建に努めている。

歴住・示寂日

法地開山 大達玄中 明治六年九月九日

二世 法從慧音 明治三十八年一月二十八日

三世 徳有東隣 明治二十六年旧三月二十九日

四世 投杖葛龍 大正十一年十一月六日

五世 即応泰道 昭和十年二月六日

六世 祥巖石雲 昭和四十四年二月十九日

七世 豊仙洞龍

八世 大成良寛 昭和四十六年二月二十三日

明治十九年一月に提出された東昌寺「寺籍財産明細帳」は兼務住職の正法寺二十三世法從慧音が記している。それによれば、すでに大達玄中が開山となっており、明治十九年以前に法從が本師の大達を勧請して法地としたものと思われる。法持寺に所蔵する『本堂並諸堂瓦葺替記録』の明治九年六月に鼎三即一が検査した修営収額に

一、金五円 東昌寺同恩金

とある。法地起立の再興報恩金を本寺へ納めたわけで、明治九年六月以前に法地となったのである。

正法寺の本堂が再建された明治二十六年は正法寺の本堂棟札によると、法從の弟子投杖葛龍が住職であった。ま

法持寺の門葉寺院について(川口)

法持寺の門葉寺院について（川口）

九世 徳応一義（前住）

十世 大順賢孝（現住）  
（開山）

### 東光寺

鳥陰山

愛知 370

愛知県海部郡大治町大字堀之内  
字郷中二八九

東光寺は『尾張徇行記』によれば、弘治三年（一五五七）に法持寺四世仙英良菊の草創という。同寺の過去帳によれば、仙英は同年八月十日に示寂しているため、どのような経緯で開創したかは明らかでない。同寺所蔵の「昭和三十四年<sup>己亥</sup>年一月ヨリ當寺世代繰出表」によれば、

平僧仙翁鶴公首座

天文十三<sup>甲辰</sup>

六月廿八日 四百十

六年

法持四世  
當寺開山

仙英舜菊大和尚

弘治三<sup>丁巳</sup>

八月十日 四百〇

三年

平僧本州源公首座

天正十四<sup>丙戌</sup>

七月廿二日 三百七

十四年

とあり、諱が舜菊となっている。また、仙翁、本州らが草創に関係したものと考えられる。

その後の詳しいことは明らかでないが、位牌に

（表） 當寺中興別禪即清和尚

（裏） 宝永四<sup>丁亥</sup>年三月十五日 七代

（表） 三部都法権大僧都法印諦了大和尚

（裏） 堀之内

東光寺本尊聖観音運慶作寄附之

正徳二<sup>壬辰</sup>十一月十八日 奉入仏

と記されたものが存在しているため、七代の別禪即清が中興している。また、正徳二年（一七一二）十一月十八日には、諦了が寄附した運慶作の聖観音の入仏式を行っている。

さらにその後、萊翁黙仙（一七一三—一八〇〇）が法地開闢の開祖となった。二世は黙仙の法嗣曇華泰秀（仏音寺五世）が就いているところから、曇華が本師の黙仙を勧請して法地開闢したものと思われる。しかし、その年次は不詳である。

明治二十四年十月二十八日の濃尾大震災では本堂、庫裡などが全倒したため、前堂を建立して仮住いとした。翌二十五年三月から本堂の再建に着手し、六月には落成して七

月一日に入仏式を行った。その他の建物は、翌二十六年六月になってすべて再建竣功され、九月一日から七日まで震災死亡者の三回忌にあたり尸羅会を啓建した。七世田中是門は震災後三年間に堂塔を復興したのである。

### 歴住・示寂日

草創開山	仙英舜菊	弘治三年八月十日
法地開山	萊翁默仙	寛政十二年七月二十八日
二世	曇華泰秀	文政十三年一月四日
三世	南嶺梅芳	慶応元年五月三十日
四世	徳室道隣	文久二年五月六日
五世	快翁慧心	明治十七年旧九月二十八日
六世	大慶俊成	明治二十八年七月十八日
七世	習学是門	昭和四年二月十五日
八世	徳翁良順 <small>(出守)</small>	大正七年十一月二日
九世	大應圓成 <small>(長男)</small>	昭和五十四年七月三日
十世	大峯宜昭 <small>(長男)</small>	(現住)

法持寺の門葉寺院について(川口)

### 正法寺

日東山

愛知367

愛知県あま市上萱津車屋一

正法寺は所蔵する『慶長縁起』によれば、天平勝宝年中(七四九―五七)に唐僧の東巖北が阿波手森のあたりに来て、日夜、坐禅しているのに地元の人が帰依し、小庵を営み萱津神社(当時は草社)の社僧とした。この小庵が正法寺の草創である。東巖の靈力を知る逸話がある。それは宝龜十一年(七八〇)に奥羽の福島県信夫の里から若夫婦(夫・恩雄、妻・藤姫)が萱津の宿にきた。しかし、妻は高熱で動けず、夫は昼夜不眠の看護をしたにもかかわらず亡くなってしまった。東巖はこれを聞き、懇ろに弔い埋葬して塚を築いた。夫は東巖のもとに身をよせ墓前に参っていたが、剃髪して弟子となり、墓の近くに庵を建てて住んだ。翌天応元年(七八一)秋、京の都に住んでいた橋本中将が東国へ赴く途中、萱津の宿に留まり古跡などをみていた。その時、近くの庵からの誦經の声にひかれみていると、若い僧が一心に本尊薬師如来に向かつて誦經している。対面して話を聞くと、藤姫は橋本中将が信夫の里に赴任していた時、里の女との間にできた子であった。驚き、

法持寺の門葉寺院について（川口）

悲しんだ橋本中将は、東巖を招き藤姫に会うことを願ったところ、東巖は唐にいた頃に得た反魂香を薫じて秘法を修した。すると旅姿で白い布を頭から背に杖をもった藤姫の姿があらわれた。しかし、声をかけようとしても声は出ず、近づこうとしても動けず、やがて香煙とともに藤姫の姿も消えてしまった。それ以来、里人たちはこの塚を反魂香塚と呼んでいる。このような逸話がある東巖も延暦十三年（七九四）四月二十日に示寂した。

正法寺の往古は、所領も多く仏閣も建ち並び多くの僧や修験者が住んでいた。中世になると所領は失い、慶長十四年（一六〇九）の水災では所領の田島が砂漠となり、寺運は衰微してしまった。その他の詳しいことは明らかにならないが、寛永元年（一六二四）には法持寺八世月峰慶吞が伽藍を再建し法脈を定めて伝法第一世となった。「正法寺縁起」によれば、元和元年（一六一五）に中興開山となり、法持寺の末寺になったとあるが、『尾張徇行記』には元和年中（一六一五―二三）に月峰が再建したという。四世徳禅重吞は元禄（一六八八―一七〇三）頃に隠居所として薬師寺（あま市上萱津矢台）を建立しており、八世義山

淳孝は享保八年（一七二三）八月に喚鐘の銘を記した。また、別の喚鐘には十二世劫外百春が明和五年（一七六八）六月に銘を記している。それには山号が日東山となっているが、明和年間（一七六四―七二）以前は妙心山であった。

法持寺二十七世大達玄中は、安政六年（一八五九）秋に法持寺を退隠し正法寺の鑑住となっている。正式の住職ではなく鑑寺であるが、中興となっている。世代には入っていないが、後に法嗣らによって二十二世中興とされた。明治二十四年十月二十八日に起きた濃尾大地震により堂宇は倒壊したが、同二十六年十一月に本堂、開山堂などは再建された。また、昭和十一年には庫裡が再建されている。二十七世即應泰道は明治三十五年一月に『粟殿森藪香物並反魂塚縁起』を、九月には『叢林』を刊行して、地元には伝わる名所の縁起や叢林に安居修行する雲水の指南書を著わしている。

歴住・示寂日

草創開山 東巖 北 延暦十三年四月二十日  
法地開山 月峰慶吞 承應四年二月三日

二世	春巖百甫	寛文十年八月二十六日
三世	鐵華独舟	
四世	徳重禪天	正徳三年三月二十八日
五世	逸宗桓雄	天和二年十月一日
六世	圓山慈智	元禄十五年四月十七日
七世	萬瑞永善	享保三年十月二十四日
八世	義山淳孝	宝曆七年三月六日
九世	輪峰実踐	宝曆三年二月十七日
十世	石梁静居	天明二年二月九日
十一世	密門定賢	明和元年四月二十日
十二世	劫外百春	寛政五年十一月十一日
十三世	利山春享	
十四世	天倫恒運	文化七年八月十四日
十五世	大晏魯康	寛政九年二月十一日
十六世	嘯山大蟲	文化二年五月二十六日
十七世	恭道常謙	享和元年七月十七日
十八世	大機頑牛	天保五年五月十八日
十九世	一山顯宗	文政十一年七月十二日
二十世	禪巖宗恪	元治元年二月二十四日

法持寺の門葉寺院について(川口)

二十一世	超然笑同	明治三十一年十一月十六日
二十二世	大達玄中	明治六年九月九日
二十三世	法從慧音 <small>(久山)</small>	明治三十八年三月二日
二十四世	柏禅尊生	文久三年十月十八日
二十五世	徳有東隣 <small>(種本)</small>	明治二十六年五月十四日
二十六世	投杖葛龍	大正十一年十一月六日
二十七世	即應泰道	昭和十年二月六日
二十八世	拙堂魯中 <small>(水野)</small>	明治三十二年十月十六日
二十九世	鶴道仙翎 <small>(青山)</small>	大正七年一月二日
三十世	禅機悦堂 <small>(科上)</small>	大正十二年八月四日
三十一世	無文良章	大正十二年五月十二日
三十二世	祥巖石雲 <small>(藤山)</small>	昭和四十四年二月十九日
三十三世	大成良寛 <small>(藤山)</small>	昭和四十六年二月二十三日
三十四世	大順賢孝 <small>(丹羽)</small>	現住

延命寺 青林山 愛知368 愛知県あま市坂牧郷三〇

延命寺の前身は『類聚国史』卷一八〇に、  
貞観十四年三月二十八日戊戌尾張国海部郡清林寺列

法持寺の門葉寺院について（川口）

之定額<sup>一</sup>

とある。貞観十四年（八七二）には清林寺と称しており、創建当時は天台宗であった。後に真言宗となり、十二僧坊のある大伽藍であったが、年を経るにつれて衰微し、十一坊が断絶して延命寺坊のみが残った。それを天文十四年（一五四五）に法持寺四世仙英良菊が開山となり、清林寺の寺号を青林と改めて山号とし、寺号を延命寺と改称して曹洞宗に改宗した。

久寿年中（一一五四―一五六）に源頼政が関東下向の折、病に罹って苦しんでいた。その時、清林寺の本尊延命地藏菩薩に祈誓したところ、一昼夜で回復した。延命寺の仙英の位牌裏書によれば、頼政の頃より延命寺と呼んでいた古伝のあることをいっており、仙英が曹洞宗として中興する以前に延命寺と改称していたものと考えられる。

延命寺の「日牌帳」によれば、仙英は弘治三年（一五五七）八月十日、二世黙要地雷は寛文九年（一六六九）三月八日に示寂しているところから、一二年間の差異がある。また、黙要の位牌には、

（表）前総持當寺草創二代黙要地雷大和尚禪師

（裏）寛政五丑三月十一日寂 九十歳

とあり、示寂は寛政五年（一七九三）となっているため、開山の仙英の示寂日とは二三年のずれがある。したがって、仙英と黙要とは師資でない。そのため黙要が草創の二代であるところから、実質は黙要が草創し仙英を勧請したのではなからうか。そのあたりの詳しいことは不詳である。

その後、二十一世徳翁頑童は文政十年（一八二七）夏に結制を修行し、宝篋印塔を建立した。また、天保六年（一八三五）には『大般若経』六百巻を吹原九良三郎、伊藤治良左衛門らの寄附を得て常什具とした。さらに、天保十一年（一八四〇）正月には開山の位牌を新しく造立し、続いて二世から十一世までの位牌も修復している。

明治二十四年十月二十八日には、濃尾大震災により本堂などが倒壊した。そこで同三十年三月に二十七世慧等兼修は再建を発願し、勧募文を記して寄附を募った。それによつて同三十七年春、奥行六間、横八間の本堂及び開山堂を新築し、その後、庫院の屋根修葺などが成った。兼修は同三十七年四月二十二日に遷化した本師の童拳天珠を勧請



してその功を譲り、二十六世中興とした。開山堂には天珠の生家の大島甚左衛門と実姉の得應全瑞尼上座が施主となつて天珠の木像を安置している。

歴住・示寂日

開山	仙英良菊	弘治四年二月九日（弘治三年八月十日）	十三世	玉洲即智	宝曆十一年六月十二日
二世	黙要地雷	寛文九年三月八日（寛政五年三月十一日）	十四世	古岩証道	
三世	雪江補心	延宝四年五月十一日	十五世	徳隠實全	
四世	卍伶文苗	享保十一年三月七日	十六世	正覚興宗	文化六年九月二日
五世	説乗慈詮	享保十四年八月八日	十七世	暁山當観	文化三年四月十四日
六世	浄山陽泉	安永四年二月九日	十八世	實応祖參	享和三年三月十六日
七世	鳳山祖鳳	元文四年六月六日	十九世	禅海龍淵	文政七年六月三日
八世	智月教海	享保十一年十一月三十日	二十世	祖海圓宗	嘉永三年一月二十五日
九世	俊成養愚	宝暦二年二月五日	二十一世	徳翁頑童	嘉永七年三月十一日
十世	恭海寛良		二十二世	全山覚仙	慶応三年九月十八日
十一世	亨国田利	明和七年正月二十六日	二十三世	天外玄教	明治十四年七月二十九日
十二世	天巖即龍	安永七年九月二日	二十四世	英山来雄	明治三十六年七月十日
	海旭祖泉	文化二年十二月二十一日	二十五世	大寛鐵道	明治二十八年七月二十三日
			二十六世中興	童拳天珠	明治三十七年四月二十二日
			二十七世	慧等兼修	昭和十四年八月十五日
			二十八世	紹三崇隆	昭和三十年四月二十九日
			二十九世	光山義明	昭和四十一年十一月二日
			三十世	慧岳石禅	昭和四十九年十二月十六日
			三十一世	諦観高明	平成二十一年三月二日

法持寺の門葉寺院について（川口）

法持寺の門葉寺院について（川口）

三十二世 大光義照 平成十一年十二月十三日

三十三世 大徹高風（川口）（現住）

長禅寺

無量山

愛知 356

名古屋市中川区富田町大字千音寺字南屋敷二七八二

長禅寺の草創は不詳であるが、古くは平田山極楽寺と称し、大伽藍であった。本尊は恵心僧都作の阿弥陀如来、脇立の観音、勢至両菩薩は慈覚大師作といわれる。天正十年（一五八二）八月八日には尾張国司織田信雄より寄進状を受けており、開基ともなった。

元和二年（一六一六）に法持寺六世大洋宗吞が中興開基となつて再建し、万治元年（一六五八）には無量山長禅寺と改号した。昭和二十年五月十七日の戦災で伽藍を焼失したため、その後、開山像と位牌を新しく安置している。

歴住・示寂日

開山	大洋宗吞	寛永九年正月五日	五世	大義白道	宝曆三年二月五日
二世	即宗察穩	元禄五年十一月十一日	六世	仏国道林	昭和六年九月十三日
三世	愚翁道仙	宝永元年六月十日	七世	大獅活道	安永八年六月六日
四世	鷹山節門	享保九年九月十七日	八世	□□禅鋒	文化七年十二月十八日
			九世	萬明柏樹	文化十一年二月二十八日
			十一世	孝岳宏道	文化十四年九月十三日
			十二世	智山笑順	弘化四年二月四日
			十三世	□□泰忍	
			十四世	丹山靈鳳	明治四年八月七日
			十五世	満禅則堂	
			十六世	寿山石翁 <small>（吉水）</small>	昭和十二年十二月十日
			十七世	法山教道 <small>（浅井）</small>	昭和二十八年九月一日
			十八世	覚巖玄洞 <small>（中野）</small>	昭和四十四年九月一日
			十九世	大淵拙龍 <small>（日比野）</small>	昭和十三年四月二十一日
			二十世	古鏡昭心 <small>（米本）</small>	平成九年十月四日
			二十一世	道鑑尚人 <small>（高野）</small>	（現住）

龍源寺

玉寶山

愛知 369

愛知県海部郡大治町大字北間島  
字屋敷三

寺や本寺の法持寺へ申達している。安政五年（一八五八）三月に寺社奉行所へ出した「寛」の寺内人数は二人で、嘉永五年（一八五二）以来は増減がないとのことであった。昭和五十七年には位牌堂が建立されている。

歴住・示寂日

龍源寺は『尾張徇行記』によれば、元和七年（一六二二）に法持寺七世嫩桂祖林が法地開山へ迎えられている。草創開基は天文元年（一五三二）三月二十七日に亡くなった桃岳宗見居士で、その末裔の吉田不説（快応心悅居士、天和元年（一六八一）十二月二十五日没）が中興開基となつてゐる。不説は名古屋御園御門附近の学者であつたといわれる。年代的にみれば、二世禅室雲智（貞享三年（一六八六）二月十五日示寂）が嫩桂を勧請したのではなからうか。その間の事情は不詳である。

その後、宝暦六年（一七五六）二月には七世龍重旭泉が涅槃像を寄附しており、十一世大圓巴乗によつて中興された。嘉永七年（一八五四）二月には境内の堂宇が大破したため、参詣人や寺内者の通路ができるように、南正面の地所へ引移すことを十四世機山良運が寺社奉行所へ届け出ている。また、同年八月には良運が隠居することになり、その後住に松栄寺（岩倉市本町）の衆寮にいた徳瑞積運が就くことを録所の正眼寺と寺社奉行所への内達を隣寺の正法

開山	嫩桂祖林	寛永九年八月七日
二世	禅室雲智	貞享三年二月十五日
三世	良阜文英	享保二年二月二十二日
四世	鼎山本龍	享保二年十一月十二日
五世	豊山仙州	明和元年八月十日
六世	定保慧胤	天明五年四月九日
七世	龍重旭泉	寛政十年十一月二十三日
八世	古洞柏仙	天明元年十一月十六日
九世	恭海寛良	寛政十一年五月二十五日
十世	禅海龍洲	文政七年六月三日
十一世	大圓巴乗	文政八年十二月十一日
十二世	大雲一乗	嘉永四年七月十二日
十三世	大棟任梁	明治十三年五月九日
十四世	機山良運	

法持寺の門葉寺院について（川口）

法持寺の門葉寺院について（川口）

十五世	徳瑞積運	明治七年五月二十六日
十六世	大順 <small>（書）</small> 巨峰	明治三十四年九月二日
十七世	俊英 <small>（書）</small> 巨鑑	昭和四年三月三日
十八世	慧菴鉄玄	明治三十五年五月十九日
十九世	大転良機	明治四十五年六月十七日
二十世	大礎鉄柱	明治四十一年十月三日
二十一世	大圓得心	昭和十六年十一月十七日
二十二世	大法得禪	昭和四十二年七月三十日
二十三世	大鑑篤司	昭和二十年七月十九日
二十四世	真瑛宗玩	平成十九年九月二十日
二十五世	□□一郎	（現住）

成福寺 医王山 愛知82 名古屋市北区瑠璃光町一―八

草創年次は『尾張徇行記』によれば、明暦年中（一六五五―一五八）に法持寺八世月峰慶吞が開基したとある。成福寺に所蔵する文政五年（一八二二）九月に寺社奉行所へ出した文書では、寛永十九年（一六四二）に月峰が開山し法地になったという。天保七年（一八三六）に作成した成福

寺の「過去簿」では、正保元年（一六四四）に月峰が住持したとある。大正三年十一月に二十四世巨海擔道が六郷村役場へ提出した「由緒書」には寛永七年（一六三〇）に第一世とあり、現在では四説がみえる。しかし、『尾張徇行記』には「成福寺界内五畝十五歩備前検除」とあり、備前検地すなわち慶長十三年（一六〇八）に行われた伊奈備前守忠次の検地で除地になっているところから、すでに月峰が開山（開基）する前に成福寺は存在していたものと思われる。なお、月峰は明暦元年（一六五五）二月二日に示寂している。

本尊は現在、釈迦如来像であるが、以前は薬師如来像であった。御身丈三尺八寸の立像で理趣（修）仙人の作という。三河・鳳来寺の本尊薬師如来と同木同作といわれ、法持寺に安置されている座像の薬師如来像と同木同作と伝えられている。しかし、どのような縁由から本尊となったか、法持寺と同木同作といわれるようになったかは不詳である。山号を医王山と称するのも薬師如来を祀っているところからと思われる。

江戸期に成福寺の前を通る武士が、しばしば落馬したり

怪事が多かったことから、東方に向けた堂宇を新築し、そこに葉師如来像を移して、本堂は別に釈迦如来像を請して本尊としたのである。その後、怪事がなくなったといわれている。<sup>1)</sup>

開山の月峰以後、百年間の歴住は、

二世徳應 道 貞享元年（一六八四）八月十二日

三世燈屋 傳 天和三年（一六八三）二月十九日

四世雄峰 智 宝永四年（一七〇七）十一月二十三日

五世逸堂 應 享保九年（一七二四）八月十一日

六世弘海 禪 享保十二年（一七二七）十一月四日

七世杖山珉靠 延享三年（一七四六）十一月一日

前任慧禪 明

前任天山麟長 宝曆十二年（一七六二）九月十日

八世大鯨吞海 安永六年（一七七七）五月二十一日

である。しかし、歴住が実際に成福寺へ居住していたかは確かでない。

そこで、法地開山後、歴住が確かに住持していたことを証明できる資料から考察してみると、貞享元年（一六八四）九月二十四日に五世逸堂察應が『法華経』を一石一字

法持寺の門葉寺院について（川口）

書写したものを納めた法華塔がある。これは、成福寺の南側の字南出にあつたが、大正元年から昭和六年にかけて行われた耕地整理で境内に移された。これにより貞享元年は、逸堂が住持であつたことは確かである。しかし、開山されて以来、約三十年間に逸堂より以前の二世、三世、四世が実際に住持していたかを証明するものがない。そのため逸堂によつて勧請されたのであろうか。

四世雄峰 智は台雲寺（宮崎県延岡市北小路）六世勇峰黙智のことで、宝永四年（一七〇七）十一月二十三日に示寂している。墓石には「六世雄峯大和尚寿塔 元禄四辛未年十二月初八日」とあり、元禄四年（一六九一）十二月は台雲寺の住職で寿塔を建立している。また、法持寺の末寺である林泉寺（京都府南丹市八木町）の重創である雄峯益英は、示寂が宝永四年十一月二十三日であるところから、雄峰黙智と同一人物ではなからうか。諱が異なる理由は明確でないが、おそらく林泉寺に住職した時、開基である赤松益則の益を採つたものであろう。

六世弘海 禪は法持寺十二世弘海義全のことで、雄峰が重創した林泉寺の二世でもある。示寂日は住持した三カ寺

とも同じ享保十二年（二七二七）十一月四日となつてい  
る。

このように雄峰、弘海の関係から法持寺、林泉寺、成福  
寺の間に何らかの關係があつたことは確かであろう。しか  
し、現在のところ詳しいことは明らかにならない。

その後、元禄五年（一六九二）四月八日に撞鐘の銘を定  
海が記している。<sup>(2)</sup>この鐘は現在、所蔵していないが、元禄  
五年には定海が住持であつたことは確かである。しかし、  
定海は『鸚鵡籠中記』卷之十一、卷之十二<sup>(3)</sup>によれば、弟子  
の恵海が寺にいた二、三人とともに、元禄十四年（一七〇  
一）十月二十日に道心坊主であつた即心に酒を飲ませて括  
り殺してしまつた。それが十二月二十五日に発覚し、寺社  
奉行所へ訴えられ捕まつた。そのため翌年三月十一日に恵  
海らは獄門になつてゐる。師の定海は弟子の不祥事の責任  
をとつたものと思われ、他国へ隠居した。したがつて、定  
海が住持した時期は遅くとも元禄五年であり、それから同  
十五年までの間と考えられる。

定海なる人物は歴住にみえないため不詳である。しか  
し、年代的には六世弘海義全が該当するが、同一人物か別

人かは確かでない。他国へ隠居とあることは、弘海ならば  
林泉寺（京都府南丹市八木町）と考えられるが、それも確  
認はできない。

正徳四年（一七一四）夏は、春養寺に借住して総持寺へ  
出世しようとした聯芳が七世杖山珉靠の下で首座を務めて  
いる。<sup>(4)</sup>したがつて、当時は杖山が住職であつた。しかし、  
杖山の後は無住になつたようである。そのため慧禅、明や  
天山鱗長が寺院運営を行つており、前住号がついている。  
杖山は延享三年（一七四六）十一月一日に示寂したが、そ  
こで、成福寺の近くにある久国寺（名古屋市北区大杉）四  
世千谷悟雪（一七四〇）の法嗣であつた大鯨吞海が八世  
に任職し、同四年（一七四七）夏には、薬師如来木像の脇  
侍（日光、月光菩薩）と十二神将木像を再造したり毫光台  
座を新しく作つており、寛延二年（一七四九）二月二十一  
日には総持寺へ出世し、<sup>(5)</sup>宝暦二年（一七五二）八月一日に  
は山門前に豊島喜兵衛の協力によつて「山門禁葷酒」とあ  
る禁牌石を建立しており、安永六年（一七七七）五月二十  
一日に示寂した。建立年次は不詳であるが、「當寺開山歴住塔」  
「現八世大鯨代立焉」とある歴住塔も建立しており、成福

寺の境内整備を行った。

呑海の後住には戒琳活乗が九世に就いた。住持になった日は明確でないが、十一世法山活眼が天明九年（一七八九）二月に成福寺住職として永平寺での転衣願いを録所の正眼寺へ出しているため、それ以前に退董したことであろう。その後は高顕寺（名古屋市中区橋）十二世、雲興寺（瀬戸市白坂町）三十二世へと昇住している。なお、活眼は寛政八年（一七九六）十一月に半鐘を什具とした際、鐘銘を記している。

享和二年（一八〇二）八月は道元禪師五百五拾回遠忌にあたったが、その時、十三世祥鳳が成福寺の大間天井を修復した。

文政五年（一八二二）閏正月、萱葺の庫裡が大破しているところから、十七世石雄恵玉は屋根を萱葺で再建する届を寺社奉行所へ出し、同七年二月には釈尊涅槃像一軸を志水町の大脇六兵衛より預って常什具とした。同九年冬には結制を修行しており、同十一年に石雄は黄龍寺（名古屋市区南區呼統）十一世へ転住し、続いて天祐寺、法持寺へと昇住した。

法持寺の門葉寺院について（川口）

天保二年（一八三一）二月二十三日には、留守居の達道が乱心で放火したため堂宇を焼失した。同五年（一八三四）、十八世本隆悦源は冬安居結制を修行し、十一月十八日から二十四日まで授戒会を開いた。なお、戒師は成福寺先住で法持寺の石雄恵玉を拜請している。悦源は失火により焼失した「過去簿」を同七年に新しく作成しており、翌八年四月には三界萬靈の五輪塔（宝篋印塔）を境内に建立した。

嘉永六年（一八五三）三月には、八月に悦源が退隠し無住となるため、無住中に大破した殿堂の修復を行い、寺役は瑠璃光寺（久屋町にあつたが、廃寺となる）の洞源が務めることを寺社奉行所へ願い出た。

安政二年（一八五五）五月には、悦源の弟子哲翁隆道が十九世に就いたが、翌六月十八日に示寂したため、位牌や「過去簿」では和尚号となっている。後住の二十世には見龍文海が継承し、本堂の再建を行った。文久三年（一八六三）十二月には、材木などを買上げるための三拾両を借用したり、慶応二年（一八六六）二月の再建手伝覚帳や三月の大工取替の拍がある。この頃には本堂が完成したものと

法持寺の門葉寺院について（川口）

考えられ、それによって文海は中興となった。

明治十九年一月には、二十二世天外暁山が「寺籍財産明細簿」を曹洞宗務支局へ出した。それによれば、当時の伽藍堂宇は本堂、庫裡、送門、開山堂、東司の他に禅堂（竪三間三尺、横六間、但瓦屋）があった。その禅堂に薬師如来木像と十二神将木像などが安置されていたが、同二十四年十月二十八日の濃尾震災によって禅堂は潰倒したため、新しく薬師堂を建立して薬師如来などを安置した。ただし、この薬師堂は仮堂であった。

同三十一年十二月二十六日には二十三世梵海珍龍が住職した。珍龍は歴代住職の位牌を新しく同じ大きさで造っており、位牌の裏には「珍龍改造」とある。なお、自分の位牌も安置しており、「自身造」とある。

同四十一年二月十九日には大安擔道が二十四世に就いた。大正十五年（昭和元年）四月五日に薬師堂新築の起工式を行い、十月には改築竣工され、同月十二日より十四日までの間、入仏開眼供養が行われた。その頃と思われるが、珍龍（号・雲谷）は「碧玉殿 八十四叟雲谷書」と揮毫した額を薬師堂に掲げた。

昭和四年八月二十八日には庫裡が狭いため、書院を新築する起工式を行い、十一月十六日に竣工した。戦後の同二十四年四月一日には、二十五世貫之道一が瑠璃光幼稚園を設立し子供の仏教教育に尽力して寺院運営を図った。さらに同五十年十月には、五十年毎に行われる薬師如来の御開帳を行い、同六十一年には二十六世貫山道雄の晋山式を迎えるため、本堂の改装修理を行い今日に至っている。

（1）成福寺二十四世中野擔道が記した「薬師如来縁起」や成福寺の口伝などからまとめた。

（2）医王山成福寺文書整理番号22と37により、定海の銘文が明らかになる。

（3）『鸚鵡籠中記』卷之十一（元禄十四年）の十二月二十五日と卷之十二（元禄十五年）の三月十一日にあげられている。（『名古屋叢書統編』第十卷（昭和四十一年三月 名古屋市教育委員会）二八八、三〇六頁）

（4）正徳六年（一七一六）閏二月に春養寺に借住して総持寺へ出世する聯芳から正眼寺へ出された「一札」（「正眼寺文書」第二六四六号）にいう。

（5）『総持寺輪住帳』の「寛延二年二月二十一日項」に出世（二萬千九百三十五世）したことがあげられている。受業



師、嗣法師は「千谷和尚」とあるところから、久国寺四世千谷悟雪の法嗣であつたことがわかる。

歴住・示寂日

開山	月峰慶吞	明暦元年二月二日
二世	徳翁道	貞享元年八月十二日
三世	燈屋傳	天和三年二月十九日
四世	雄峰智	宝永四年十一月二十三日
五世	逸堂應	享保九年八月十一日
六世	弘海 <small>禪</small>	享保十二年十一月四日
七世	杖山珉靠 <small>禪</small>	延享三年十一月一日
前往	慧禪明	
前往	天山麟長	宝暦十二年九月十日
八世	大鯨吞海	安永六年五月二十一日
九世	戒琳活乘	文政二年三月十四日
十世	華頂巨鳳	寛政八年六月十八日
十一世	法山活眼	
十二世	大嶺覚僊	寛政十二年十二月十一日
十三世	仙祥鳳	
十四世	徹山瑞	天保八年六月二十二日

法持寺の門葉寺院について(川口)

十五世	鄧山朝洲	天保十年二月八日
十六世	白仙龍	安政三年十一月十三日
十七世	石雄恵玉	安政六年六月二十三日
十八世	本隆悦源	文久二年六月六日
十九世	哲翁隆道	安政二年六月十八日
二十世	見龍文海	明治五年三月十九日
二十一世	巨山漸海 <small>高島</small>	大正十一年八月一日
二十二世	天外暁山 <small>水野</small>	昭和五年五月二十六日
二十三世	梵海珍龍 <small>原山</small>	昭和四年一月二十日
二十四世	大安擔道 <small>中野</small>	昭和十四年七月二十一日
二十五世	貫之道 <small>原山</small>	昭和五十八年十二月一日
二十六世	貫山道雄 <small>原山</small>	(現住)

林泉寺 清涼山 京都66 京都府南丹市八木町野条南条二八

林泉寺は地元の中川泰三氏が所蔵する中川庄右衛門書写の「林泉寺由緒記」によれば、播磨国の守護職に任ぜられた赤松則村(一二七七一—一三五〇)の子孫であつた益則が、明応元年(一四九二)に創建した寺院で、初めは菩提

法持寺の門葉寺院について（川口）

山観音寺（真言宗）と称した。益則は出家して僧となり、赤松家の菩提を弔っている。その後、延宝年中（一六七三—一八〇）に重創の雄峰益英、前住の賢安 衆が法持寺十世海岸義雲を開山に勧請し、曹洞宗に改めて清涼山林泉寺と改号した<sup>①</sup>。

二世は弘海義全で、法持寺十二世でもある。そのため弘海も海岸を勧請した一人かもしれない。したがって、曹洞宗となった頃の林泉寺は、成福寺と法持寺の歴住と何らかの關係があつたものと思われるが、詳しい事情は明らかにならない。

「過去帳」によれば、三世泰嶺観清と四世益洲義道の項に「日向之産」とあり、日向（宮崎県）の出身である。重創の雄峰益英は日向の台雲寺（宮崎県延岡市北小路）六世勇峰黙智と示寂日が同じであることから、同一人物と考えられる。そのため、泰嶺と益洲は台雲寺時代の雄峰の弟子か法孫と考えられる。

六世黄山曇龍は地元の松本家出身で、享保三年（一七一八）に生まれた。松本家は農業とともに酒造業を営んでいた豪農で、深く仏門に帰依した家である。曇龍は幼時に林

泉寺四世益洲義道について薙髮し、弁道精進して宗義を究め逆水洞流の法を嗣いだ。逆水の後住として覚伝寺（滋賀県高島市新旭町）十五世に住持して以来、林泉寺六世、長円寺（西尾市貝吹町入）十四世、崇信寺（静岡県周智郡森町）二十三世にも就いた。天明二年（一七八二）には泉龍寺（静岡県周智郡森町）を法地開闢し、同四年三月には秋葉三尺坊大権現を勧請して山門興隆、村内繁栄を祈念し自分の隠寮地とした。しかし、長円寺十七世として再住することになり、再住中の同五年には泉龍院（新城市豊栄）一三二世に輪住し、同七年（一七八七）十月十七日には七十七歳で長円寺において示寂した<sup>②</sup>。

天保三年（一八三二）には、松本四郎兵衛の兄（出家して普照といつた）が修行を終えて隠居した普照跡を、普門庵と称して林泉寺の隠居所とした<sup>③</sup>。

十五世大恵湛堂代の嘉永六年（一八五三）三月には、伽藍が烏有に歸した。そこで伽藍復興のため浄財を勧募するとともに再建にとりかかった。京都府立総合資料館に所蔵する「松本家文書」には、普請中の安政四年（一八五七）八月の木挽職方の日附帳や九月に記した普請用木の木割控<sup>④</sup>

があり、それらによって当時の様子を知らることができる。また、同六年（一八五九）六月の再建御造営銀の出入控帳や文久元年（一八六一）一月改めの普請中諸人用勘定帳もある。翌二年九月には、伽藍の復興に多くの浄財を喜捨したことから院号を授与する「院号證帖」が住持の湛堂より松本喜左衛門へ贈られている。

さらに元治二年（一八六五）三月には、同じように田畑などを寄附していることから松本喜左衛門と明田嘉兵衛の両家に永々の院号居士、大姉号授与の「許状」を贈っている。<sup>⑤</sup>

十七世徳川柏文が住持であった明治十三年四月五日には随意会地に寺格を昇格しており、大正十一年から翌年にかけては鐘樓堂が建立され、昭和二十九年には梵鐘及び山門が再建された。平成十五年十月には新しく庫裡が建立されている。

- (1) 林泉寺の由緒については『八木町寺院誌』（昭和五十八年十一月 八木町教育委員会）七十九頁にあげられている。  
 (2) 黄山曇龍の行歴は京都府立総合資料館に所蔵する「松本文書」、『大洞山泉龍院』（昭和三年十月 今泉忠左衛

法持寺の門葉寺院について（川口）

- 門）、泉龍寺の「歴住記」によって明らかにした。  
 (3) 「松本文書」番号六一。  
 (4) 「松本文書」番号八七、一〇〇。  
 (5) 「院号證帖」は「松本文書」番号三四六、「免許状」は番号三四五。

歴住・示寂日

開山	海岸義雲	元禄五年九月十五日
二世	弘海義全	享保十二年十一月四日
三世	泰嶺觀清	正徳六年二月二十五日
四世	益洲義道	宝暦六年六月五日
五世	威雲流猛	
六世	黄山曇龍	天明七年十月十七日
七世	寛元太方	寛政三年一月二十一日
八世	潜山澤龍	天明五年六月八日
九世	大孝良義	文化十年十月十一日
十世	珠山哲龍	文化四年三月二日
十一世	泰山梁宗	文政五年十月二十二日
十二世	蘭桂大林	天保八年十月十四日
十三世	達源大川	弘化二年十二月二十九日

法持寺の門葉寺院について（川口）

- 十四世 大恭良堂 弘化四年三月十三日  
 十五世 大惠湛堂 明治十五年一月二十二日  
 十六世 大禪智道 明治十二年七月十八日  
 十七世 月鴻柏文（金松） 明治三十七年一月十日  
 十八世 松龍全虎（兼元） 明治三十一年四月九日  
 十九世 天真覺道（兼元） 大正八年五月二十二日  
 二十世 一翁來田（兼元） 昭和三十三年十月三十日  
 二十一世 天瑞來鳳（兼元） 平成十二年十一月四日  
 二十二世 一路來吉（兼元）（現住）

重創雄峯益英 宝永四年十一月二十三日

前任賢安 衆 延宝三年十月一日

前任高岩 清 正徳六年二月四日

妙覚寺

本光山 愛知 95

名古屋市熱田区白鳥二―二二―  
一五

妙覚寺は元瑞雲山善長寺と称して遠江国敷知郡浜松駅の新豊院（浜松市北区三方原町）の末寺であった。創建は大永七年（一五二七）四月といわれ、開基は医者の浅井藤次

郎安親（童名は市若丸、枝月善湖居士、享祿三年（一五三〇）五月二十日寂）で、開山は新豊院五世文白慶昌（勅賜致嵩禪師）であった。しかし、その後、殿堂などが荒廃すること久しかったため、明和元年（一七六四）八月に法持寺十五世督宗淳董は、法持寺檀徒岡本清七氏の援助を受けて殿堂を一新し、法地となして本光山妙覚寺と改め法持寺の末寺となった。明和年間（一七六四―七一）に再建された本堂、書院、開山堂、山門、鐘楼などは戦災を受けなかったが、昭和五十一年及び同六十年に白鳥幼稚園の園舎拡張にともない本堂、書院、開山堂も鉄筋コンクリート造として再建された。

歴住・示寂日

- 草創開山 文白元昌  
 中興開山 督宗淳董（應） 安政二年三月十一日  
 二世 周室淳鼎 安永四年四月九日  
 三世 活宗淳快 文政七年八月十五日  
 四世 價運鼎重 文政四年九月十五日  
 五世 實參督全 天保七年四月四日  
 六世 貫道全中 天保十四年十二月十五日

七世 祖英活雄 天保九年十月二日  
 八世 月喚滄洲 明治十八年六月十八日  
 九世 盧雲確篠 明治三十四年七月十八日  
 十世中興 齊環了為 明治四十年十二月十九日  
 十一世 了天法珠 大正九年二月十一日  
 十二世再中興 惠三明道 昭和四十年七月二十二日  
 十三世 三南孝雄 昭和二十年二月二十六日  
 十四世重興 惠法正幸 平成十八年四月二十九日  
 十五世 □□幸彦 (現住)

**天年寺** 松翁山 愛知131 名古屋市中川区松年町二一五七

天年寺は、玉泉寺（愛西市稲葉町本郷）四世慈堂岑隆（宝暦三年（一七五三）五月九日寂）が寛保二年（一七四二）十一月に久田作左衛門漏休を開基として創建された。その後、法持寺二十七世大達玄中が九世に住持した。大達は正法寺（あま市上萱津）に安置されている位牌の裏書を見ると、初め観音寺（北名古屋市六ツ師）に首先住持し、それ以来、天年寺、黄龍寺（名古屋市中南区呼続）、法持寺

法持寺の門葉寺院について（川口）

と転住した。戦前まで観音寺に安置してあった鐘には天保二年（一八三二）に「玄中代」の銘があり、同十四年（一八四三）冬には法持寺へ住持したとみられるところから、天保二年から同十四年までの間に大達は天年寺、黄龍寺に住持した。しかし、両寺における大達の活動はまったく明らかにならない。

大達の後、十二世には法嗣の法從慧音が就き、十三世童拳天珠、十四世亨元貞道、十五世提掃唯一（哲掃惟一）は法持寺二十八世鼎三即一の法嗣である。それ以後、鼎三門下の法流を汲む人法系となり、法持寺の門葉となった。大正十一年七月八日には山門を除いて全山を焼失し、同十四年に再建された。また、昭和二十年三月十一日には空襲によって焼失し、同二十四年九月に再建された。同五十六年八月から翌年十一月頃には庫裡、書院、開山堂が完成した。

**歴住・示寂日**

開山 慈堂吟龍 宝暦二年五月九日  
 二世 法山一乘  
 三世 應孝順法 文化三年一月五日

法持寺の門葉寺院について（川口）

四世	大轉法輪	文政四年四月二十五日
五世	真軸祖禪	
六世	実山篤全	
七世	大恵絶学	
八世	北海倍州	文政十一年八月十二日
九世	大達玄中	明治六年九月九日
十世	卧山賢隆	文化八年十二月六日
十一世	底禪龍道	
十二世	法從恵音	明治三十八年三月二日
十三世	童拳天珠	明治三十七年四月二十一日
十四世	亨元貞道	大正二年七月十日
十五世	提掃唯一	明治二十二年十一月二十四日
十六世	提咄斧山	明治四十五年六月一日
十七世	大用活通	
十八世	大英賢秀	昭和二十四年七月八日
十九世中興	賢童領珠	昭和三十八年九月十七日
二十世	大賢三明	（現住）
二十一世重興	紫雲昭三	平成二十二年四月二十七日
二十二世	大賢三明	（再住）

慧光院

相生山

愛知 106

名古屋市天白区天白町大字野並  
字相生二八一—一

野並の相生山は、熱田大宮司千秋氏の所領地であつたため寺院はなかつた。大正十年に高岡徹宗が相生山を開発するにあたり、法持寺三十二世慧等兼修は個人資金を投じて土地（山林）を購入し、白鳥山別院（白鳥山説教所）を建立した。そこで慧等は亡き父（慧光院竹溪寿仙居士・明治十八年九月十七日寂）、母（慧明院竹容貞節大姉・明治六年六月二十五日寂）を開基に仰ぎ、自らは開山となつて父の院号の慧光院を寺号とした。当時、白鳥山別院の執事であつた三浦大心が二世に就き教化活動に努めた。大正十三年秋には仮本堂を建立して解脱上人作の釈迦如来像を本尊にし、天白叱枳尼天を鎮守として祀つた。同十五年には火防弘法大師を奉安し、三月には「教会所設置願」が設立者兼管理人の三浦大心より愛知県知事山脇春樹へ提出され、慧等はその担任教師となつた。

昭和二年春には身代地藏菩薩を安置して、毎月の縁日には参詣者がふえてきた。そのため仮本堂が手狭になり、本堂の建立を發願し十方の篤信者に喜捨を受けて完成した。

同九年四月二十四日には三浦大心の晋山式を行い、翌二十  
五日より尸羅会を厳修した。

戦後は戦災で焼失した法持寺の伽藍復興事業に協力し、  
昭和三十年に本堂を法持寺へ売却して法持寺の本堂となっ  
た。それ以後は、庫裡を本堂として今日まで至っている。

#### 歴住・示寂日

- 開山 慧等兼修 昭和十四年八月十五日  
二世 喜翁大心(山田) 昭和四十二年八月八日  
三世 南華大乘(山田) 昭和五十七年十月十一日  
四世 諦観高明(山田) 平成二十一年三月六日  
五世 大徹高風(山田) (前住)  
六世 大拙高裕(山田) (現住)

#### 地蔵寺

福昌山 愛知1088 名古屋市瑞穂区柳ヶ枝町二一七二

地蔵堂(現在、地蔵寺)より印施された「延命地蔵大菩  
薩御縁起」によれば、創建は不詳であるが、本尊延命地蔵  
菩薩は念佛行者柔蓮社順譽忍定上人が鬼ヶ城において修行  
中、地蔵尊の首を感得し、それを持ち帰って胴体を彫刻し

法持寺の門葉寺院について(川口)

た。その後、熱田奉行津金文左衛門は念持佛を忍定上人に  
寄贈し、それを胎内に納めたところから「腹籠りの地蔵  
尊」ともいわれ、靈験によって多くの信者を得るようにな  
り、明治十三年三月十六日、中興開山に法持寺二十八世鼎  
三即一が就いて佛堂を建立した。<sup>(1)</sup>昭和十五年三月から十月  
の間に、元の境内地(名古屋市熱田区神宮)より現在地へ  
移転し、同十七年三月三十一日には宗教団体法によって寺  
院に認可されて地蔵寺と改称した。

地蔵寺には

當堂中興開山鼎三即一大和尚

の位牌が祀られており、文久二年閏八月二十八日に鼎三が  
跋文を記した研学聚螢居士書写の『観音普門品』を所蔵し  
ている。

(一) 昭和十七年に、山口賢光尼が曹洞宗宗務院へ提出した  
「曹洞宗寺籍簿」の由緒による。

#### 歴住・示寂日

中興開山 鼎山トウサン即一 明治二十五年十一月二十八日  
初住 祖庭賢光(山田) 昭和四十五年三月九日

法持寺の門葉寺院について（川口）

二世 宗岳賢成（現住）

三世 智峰良光<sup>(山)</sup> 昭和四十七年二月二十七日

## 庚申寺

愛知<sup>192</sup> 愛知県一宮市大字杉山字郷  
内七

庚申堂（現在、庚申寺）は「庚申堂由緒沿革書」（庚申寺蔵）によれば、慶長十三年（一六〇八）、開基今井半左衛門によって創立され、天台宗光明寺（一宮市大字光明寺）の末庵であった。本尊は青面金剛童子で、聖徳太子作と口伝されている。文政十年（一八二七）三月、尾州家御広敷役所や老女方より菩提供養のため、西国三十三ヶ所観世音像三十三体が寄進され、天保二年（一八三一）十二月には十五代尾張藩主徳川茂徳誕生によって、第一観世音像へ厨子などが寄進された。同九年（一八三八）七月には御広敷、老女方より大門を、十月には茶湯料などが寄進され、尾張藩と深い関係にあった。<sup>(1)</sup>

開基の今井半左衛門は永平寺五十世玄透即中生家の先祖であり、庚申堂には玄透即中両親の位牌や墓碑も祀られているところから、玄透と因縁深い寺院でもある。だが、そ

の後荒廃したため、法持寺二十八世鼎三即一に参随した探源千丈尼（二世）は嘉永三年（一八五〇）十月十九日示寂の眼室本明尼を開基に、今上皇帝聖寿萬安位牌や道元、瑩山両祖の位牌を祀り、鼎三を再興開山に請して曹洞宗とした。再興された年月日は不詳であるが、探源千丈尼は明治二十一年二月二十日示寂であるところから、明治二十一年以前と思われる、鼎三は秋葉寺退隠後、庚申堂にも寓居して提唱を行っていたといわれる。<sup>(2)</sup>

庚申堂には、

法持二十八世鼎三即一大和尚

法持二十九世吹毛冷生大和尚

法持三十世童拳天珠大和尚

法持三十一世亨元貞道大和尚

の位牌も祀られており、三世観禪定光尼は鼎三のみならず、弟子の冷生、天珠、貞道との交流もあったものと思われ、法持寺の末庵となった。昭和二十八年八月二十四日に宗教法人法により、庚申寺と寺号を改称している。

(1) 「庚申堂由緒沿革書」（庚申寺蔵）による。なお、『葉粟



郡紀要』(大正十年三月 愛知県葉栗郡役所) 二二二頁の  
庚申堂も参照した。

(2) 高橋竹迷「玄透禪師の誕生地」(昭和十年五月「傘松」  
第九十二号)に、玄透即中との因縁のことや鼎三が再興し  
て曹洞宗になったことをいう。

(3) 庚申寺住持酒井豊瑞の口伝による。

### 歴住・示寂日

開山 鼎三即一 明治二十五年旧十月十日  
二世中興 探源千丈(自傳) 明治二十一年二月二十日  
三世再中興 観禅定光 大正十五年三月三十日  
四世 益法瑞妙(山傳) 昭和三十一年二月十六日  
五世 祥山豊瑞(兼傳) (現住)

## 二、離末、廃寺した門葉寺院

長明寺 大悲山

長明寺は宝暦二年(一七五二)に完成した『張州府志』  
に、

法持寺の門葉寺院について(川口)

在西条村、号大慈山、曹洞宗、属熱田白鳥山法持寺  
とあり、海東郡松葉庄西条村に所在し、山号は大慈山と号  
した。開山や歴住は不詳であるが、宝暦二年以前に建立さ  
れていたことは確かである。

寛文年間の末期(一六七二)に成った「寛文村々覚書」  
によれば、

一、同宗 熱田法持寺末寺 長明寺

寺内九畝拾歩 備前検除

とあり、慶長十三年(一六〇八)に行われた備前検地では  
除地となつてるところから、慶長年間以前に寺は存在し  
ていたものと思われる。

江戸中期から末期にかけて桶口好古が記した『尾張徇行  
記』には、長明寺の書上げから由緒などが記されている。  
それによると、

○當寺書上ニ境内九畝十歩備前検除ノ訣覚書ニ同シ、  
此寺草創ノ紀年ハ不知、昔時ハ熱田法持寺ニ属シテ大  
悲山長明寺ト号セシカ、天明二寅年因願臨濟宗ニ改  
メ、妙興寺ニ属シテ光白山光明寺ト改号セリ

とあるが、草創の年次は不詳である。山号は『張州府志』

法持寺の門葉寺院について（川口）

説と異なり、大悲山となつてゐる。天明二年（二七八二）には願書上により、臨濟宗へ改宗し妙興寺（一宮市大和町字妙興寺境内）の末寺となり、光白山光明寺と改号した。

この光明寺は、現在でも海部郡大治町西条字南屋敷にあることが『大治町史』（昭和五十四年十二月 大治町役場）四七五頁に紹介されている。しかし、実際は『張州府志』という大慈山の山号の光明寺で、浄土真宗本願寺派系の単立となつてゐる。そのため『大治町史』説は誤りである。

では、妙興寺の末寺からみると、妙興寺に所蔵する寛文七年（一六六七）の文書には、末寺が十カ寺あつたようである。その中に光明寺がある。しかし、光明寺は天明二年（二七八二）に日蓮宗へ改宗し、了栄山等澗寺（稲沢市下津光明寺町）と改号してしまつた。<sup>①</sup>その光明寺が移転した後へ、法持寺の末寺であつた長明寺が移転してきた。そこで、長明寺は天明二年（一七二八）に妙興寺の末寺となり、大悲山光明寺（稲沢市正明寺）と改称した。なお、山号は改めずに大悲山のままであつた。したがつて、以前からの末寺であつた光明寺と新しく末寺となつた光明寺は異

なつた由緒の寺院である。

このように長明寺を草創とする光明寺は大治町と稲沢市に存在しているのである。離末した天明二年頃の法持寺住持は、十五世督宗淳重代であつた。

（一）河野宗寛編『妙興寺誌』（昭和四十年四月 長嶋山妙興報恩禅寺）五十一頁や『新修稲沢市史 研究編五 社会生活上』（昭和五十八年三月 新修稲沢市史編纂会事務局）九頁で述べてゐる。

（二）『新修稲沢市史 研究編五 社会生活上』七頁で指摘してゐる。

## 大泉寺 龍洞山

『延享度寺院本末牒』にみえる大泉寺は龍洞山と号し、古渡村にあつた。延享年度（一七四四―四七）には法持寺の末寺であつたが、その後、洞仙寺の末寺となつた。『尾張志』によれば、平僧地時代の洞仙寺七世日洲禅東（宝永五年（一七〇八）二月四日示寂）が建立して隠居所とした。貞享三年（一六八四）には廢寺の寺号を移して寺号を

称し、先住の六世洲山芳益（延宝五年（一六七七）八月十日示寂）を請して開山とした。

寛保三年（一七四三）には本堂が焼失しており、延享年間以後に再建されて以来、洞仙寺の末寺となった。本堂の本尊は空海作の宝冠釈迦牟尼仏木像で、観音堂には行基作の正観音木像が祀られていた。これは洞仙寺の元の本尊で、愛智一郡の鎮守仏といひ伝えられている。地藏堂には空海作の地藏菩薩木像が祀られ、田中の地藏と呼ばれていた。また、愛染明玉堂などもあったが、明治十四、五年頃に廃され洞仙寺と合併した。

## 吒枳尼天堂

大正十五年二月発行の『曹洞宗寺院名鑑』や昭和五年七月に愛知県第一曹洞宗務所より発行の『管内寺院名簿』には、

等 八〇 名古屋市南区熱田白鳥町 吒枳尼天堂  
と吒枳尼天堂があげられている。これは法持寺の末庵であった。

法持寺の門葉寺院について（川口）

吒枳尼天は稲荷であるところから、稲荷を祀った小堂と想像できる。しかし、それが法持寺の境内にあったのか、それとも境外地にあったかなどの場所を確定することはできない。熱田白鳥町とあるため、法持寺附近であったことは確かであろう。

稲荷のエピソードが法持寺二十八世鼎三即一にある。それは法持寺の観音堂に巢を作っている鳩がしばしば狐に食われるため、鼎三は境内にある光玉稲荷の祠前へ行き、稲荷に叱言を述べた。それ以来、狐による害はなくなったといわれ、生物を哀れむ慈悲の心情にユーモアをとり入れて諭した鼎三の力量を知ることができる。

このエピソードによれば、法持寺境内に稲荷堂があったものと思われる、それが吒枳尼天堂であったのであろうか。詳しいことは明らかにならない。その吒枳尼天堂は昭和十二年二月発行の『曹洞宗寺院名鑑』にはあげられておらず、そのため、昭和五年から同十二年の間に法持寺へ合祀されて堂名がなくなったか、あるいは廃堂されたかと思われる。

法持寺の門葉寺院について（川口）

（一）横井雪庵『各宗高僧譚』（明治三十年十月 春陽堂）三十八頁に「白鳥鼎三、稲荷に叱言を云ふ」による。

## 鉄地藏堂

鉄地藏堂は俗に旗屋の地藏とか鉄地藏と称して、尾張六地藏の三番目の地藏尊を祀った堂庵であった。鉄地藏は桶狭間の合戦で、戦場に捨てられた刀劔甲冑の類を集めて戦没武将の菩提を弔むために铸造されたものといわれる。<sup>(1)</sup>

もとは天文年中（一五三二―一五五）に友松寿鶴が断夫山の北に創建した江南寺（後の成福寺）の門前にあつたが、弘治二年（一五五六）に江南寺は現在の地（名古屋市熱田区白鳥）へ移転し寺号を改めた。そのため鉄地藏堂は北山墓地の入口となり、その後、現在地（名古屋市熱田区旗屋）へ移っている。<sup>(2)</sup>

如来教を開いた教祖ぎの（嬭姪院青室妙蓮大師）は近くの新旗屋町に生まれており、父は鉄地藏を信仰し参詣祈願していた。その縁であろうか、きのの教えを奉ずる講は文政十二年（一八二九）に成福寺の扣であつた地藏堂及び鉄

地藏一体を譲り受けて護ることになった。しかし、尾張藩寺社奉行所は天保二年（一八三一）二月二十五日と翌三年三月十五日に教えを奉ずる金毘羅講の禁止令を出した。講は小寺佐兵衛（如々庵月中一夢上座）らによって奉持されていたが、小寺は出家して法持寺二十七世大達玄中の弟子となり、鉄地藏堂の境内を拡張したり、堂宇を改築して玄中を鉄地藏堂の開山に迎え法持寺の境外仏堂となった。そのため鉄地藏堂の開山堂には玄中の位牌が祀られており、教祖ぎの永代供養月供料や茶湯料が鉄地藏堂守から法持寺へ納められている。それ以来、法持寺の傘下に入ったが、昭和二十一年二月二十八日の宗教法人令により「如来宗」を標榜して法人となり、同二十七年七月五日には、宗教法人法によって宗教法人嬭姪院と称し離末した。<sup>(3)</sup>同三十七年十二月八日には「如来教」と変更し、登和山青大悲寺と改号している。

（一）『如来教団由緒及沿革概要』十八頁。

（二）『名古屋市史 社寺編』（大正四年七月 名古屋市役所）六五七頁の「鉄地藏堂」と六六八頁の「成福寺」による。

(3) 『熱田 白鳥山法持寺史』(未刊)の第二編第六部の「第三十三世 光山義明」や第三編第二章の「如来教と法持寺」を参照されたい。

法持寺の門葉寺院について(川口)